

# 随筆文学に見る 書のたしなみ



九州国立博物館長  
しま ひろあき  
島谷弘幸

1953年岡山県高梁市生まれ。東京教育大学卒。小松茂美博士に師事。東京国立博物館副館長を経て、2015年から九州国立博物館長。文部科学省教科用図書検定調査審議会委員(08～17年度)など歴任。

新しい学習指導要領では、日本の文字文化の豊かさを理解することが、これまで以上に求められています。最終回では、『枕草子』などの随筆文学を取り上げ、「書」としての美的要素という点から解説します。

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。」という書きだして知られる清少納言の『枕草子』は、兼好法師の『徒然草』そして鴨長明の『方丈記』とともに、日本を代表する随筆として知られる。この書きだしを読むたびに、「山ぎは」の解釈である山に接している空と、「山の端」の山と空が接している境、いわゆる山側の稜線の違いをしつかり覚えさせられた学生時代の記憶がよみがえってくる。

春はなんととっても曙である。ようやく空が白々としていき、しだいに山際が明るくなって、薄い紫色に染まった雲がたなびいているのが良い、という。続け

て、夏は夜、秋は夕暮れ、そして冬はつとめて(早朝)が良い、とそれぞれの季節の素晴らしさを、清少納言の感覚で伝えてくれる。これは、宮廷貴族の感覚を代表しているものと思われる。

さて、中国では、詩と書と画に優れることを意味する「詩書画三絶」は、文人にあつて理想の姿であつた。「琴棋書画」も、中国において高級官僚で文化人である士大夫の身につけるべきものとされた。そのいずれにも、書が必須のものとして加えられている。また、日本ならではの精神や考え方をもちつて中国の学問を吸収、消化することを「和魂漢才」というが、書の世界でもこの考えは当てはまつている。「三跡」に代表される和様の書や漢

字の草書体から生まれた「仮名」も好例である。

ところで、平安時代から鎌倉時代中期ころまでの主として歌集を書写した筆跡を、今日では「古筆」とよんでいる。これらは身の回りにおいて鑑賞する調度用の豪華な手本のことで、儀式や行事などに際しての贈り物とされたものである。これは、男性であつても、女性であつても手習い、すなわち書道を大切な教養の一つとして考えていたことと密接に繋がりがあり、書には言語としての役割のほかに美的な要素が重要であると考えていたのである。

その書に対する宮廷貴族の姿勢が多く、の文学作品に取り上げられている。たと

えば、この『枕草子』一五二段(図1)の「手よく書き、歌よくよみて、ものををりごとにもまづ取り出でらるる、うらやまし」(筆跡が巧みで、和歌が上手に詠めて、何かあるたびに最初に選ばれるのはうらやましい)など、『枕草子』には筆跡に関わる言及が多数散見する。宮廷貴族にとつては、漢学の素養、音楽、和歌などとともに、書が巧みであることが望ましい姿として考えられていた。つまり、文字に対する、美しく、早く、優美に、あ

るいは格調高くという意識は、男性から女性に対する評価、あるいは女性から男性に対する評価の一つとしても重要になつていった。

うかというところ、今日、外来語を表現するのに重宝している片仮名があるが、これは漢字の字画の一部分だけを活用したもので、役所や南都六宗の寺院の学僧によつて、漢文を訓読するための仮名(振り仮名・送り仮名)として考案されたのが始まりである。したがつて、当初は漢籍を読むための補助的な文字にすぎなかつた。その後、平安中期以降は漢籍を離れての使用もほかに増加し、平安末期にはほぼ現在の形となった。鎌倉時代になると、片仮名だけでなく『方丈記』を書いた本もようやく出現し、この頃に独立した仮名として位置づけられるようになったことにも注目しておきたい。



図1 『枕草子』一五二段  
(部分・国立国会図書館ウェブサイトより)

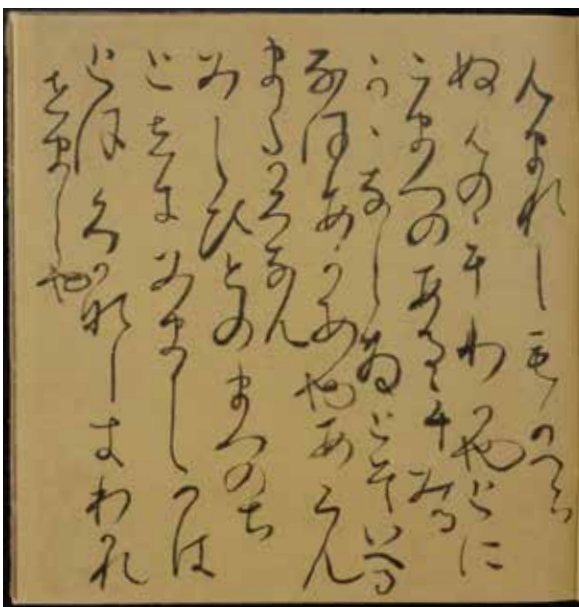


図2 『定家本 土佐日記』藤原定家による紀貫之自筆本の臨書  
(国立国会図書館ウェブサイトより)

ところ、今日、外来語を表現するのに重宝している片仮名があるが、これは漢字の字画の一部分だけを活用したもので、役所や南都六宗の寺院の学僧によつて、漢文を訓読するための仮名(振り仮名・送り仮名)として考案されたのが始まりである。したがつて、当初は漢籍を読むための補助的な文字にすぎなかつた。その後、平安中期以降は漢籍を離れての使用もほかに増加し、平安末期にはほぼ現在の形となった。鎌倉時代になると、片仮名だけでなく『方丈記』を書いた本もようやく出現し、この頃に独立した仮名として位置づけられるようになったことにも注目しておきたい。